

いま湧き起こる母校への郷愁—大学出てから 15 年余—

佐藤 暢 (1995 年卒(物理気候学)、JST イノベーションサテライト高知)

1. 「京大地球物理学研究の百年」を読んで思い起こす大学院入試のこと

地球物理学教室同窓会から本誌（以下「百年誌」）発刊の案内を受け、連絡先とされていた竹本修三先生にメールを出し、百年誌を手にしたのは2010年10月のことである。私は学部卒であり、大学での在籍期間は短いものであったが、それでも、講義や実験などで当時お世話になった先生方のお名前を拝見し、当時を懐かしみつつ、興味深く拝読させていただいた。その中で思い起こされたのが、1993年の院試である。

1990年の入学以前から、「将来は気候変動モデル研究に携わる」という漠然とした思いを抱いていた。3回生になって、ワークステーションを使った大気現象の解析や気候モデリングなど研究の入口ともいえる内容を学び始めた一方で、このまま研究の世界に入っていくことにふと疑問を感じるようになった。親の影響で子どもの頃から山や自然に親しみ、天気予報を欠かさず見るようになり、高校生の頃から「地球環境問題、気候変動問題に取り組みたい」という思いを抱いてきたが、今の自分は、自然を相手にするというより、むしろコンピュータと格闘しているだけではないか・・・。

そのようなとき、廣田勇先生の「グローバル気象学」（東京大学出版会、1992年）に出会った。ここで「21世紀の気候予測などという試みは、社会的要請はあっても、学問的意義の不明な行為である」との言葉に衝撃を受けた。私はますます、自分の進路に悩むことになってしまった（廣田先生、失礼をお許しください）。とはいえ、明快な代替案もなく、かねてからの予定通り、4回生の夏に院試を受けることにした。だが、もともと身が入っていないので、その結果は受ける前から明らかであった。

口頭試問の最終局面で「数値シミュレーションによる100年先の予測は、100年先にならないと検証できないことを思うと、その行為には疑問を感じつつも、気候モデルを研究する意義はそれなりにあると思う」といった旨を述べたら、たしか海洋学の先生に、ものすごく怒られた覚えがある（当時の非礼をお詫びします）。その場には廣田先生や村松先生もいらしたことも覚えている。苦い顔をされていた気もするが、これは定かではない。

かくて院試は不合格となった。だが、これは気候モデルの学問的意義云々という以前に、これまでサークル活動に明け暮れていた自らの生活態度と勉強不足による当然の帰結であった。ところでそのころ、木田秀次先生（故人）が物理気候学講座の教授に着任されていた。木田先生は、冬の追試の受験を強く薦めてくださったが、「このまま修士課程に進むよりも、自らの生活態度を改めて、自分の将来をじっくりと考えてみたい。院試は5回生時に再挑戦しよう」との思いで辞退した。

百年誌を読んで、当時の物理気候学講座を巡る状況をあらためて知ったとき、ふと、木田先生が「大学院の定員が大幅に増えるから、進学するなら今がチャンスだ。研究環境ももっと良くなる。あと1、2年が辛抱なんだ」と、おっしゃっていたことを思い出した。事実その後、里村雄彦先生が着任され、大学院生も増え、研究室は拡充された。しかし私は、そのような様子を知ることなく大学を離れた。私が大学院に進学したところで、どこまでお役に立てたかどうかは分からない。だが、あのときの自分の態度を思うと、木田先生には申し訳ないことをしたと思っている。謹んでお詫び申し上げたい。

2. 研究の世界を離れ、ビジネスの世界へ

しかし、そのような恩師の配慮を棒に振った頃、思いもよらない転機が訪れた。気象業務法の改正に伴う天気予報の自由化と気象予報士制度の開設である。このことは時の話題となった。法学部にいたサークル仲間から『財界展望』という月刊誌に民間気象業界の特集がある」という話を聞き、さっそく大学生協書店で注文、いままで日陰業界ともいべき民間気象業界の存在を知った。特集記事の脇に、当時 20 機関程度であったか、気象業務許可を受けている事業者の一覧があった。直感的に「大学院には行かず、この業界に行こう！」と思い立ち、それらの事業者の手紙を書き、新卒募集の状況を聞いた。

このような経緯を経て、株式会社ウェザーニューズに就職することになった。1995 年 4 月のことである。当時、研究の世界を離れ、ビジネスの世界へ飛び込もうとする私を心配した友人知人から、「気象学がビジネスとして成り立つのか」という声を多く聞いたが、その後の民間気象業界の発展は皆様もご存じのとおりである。僭越ながら私としては、民間気象業界は、自然科学の学問的知見つまり研究をビジネスに活かした、ひとつの典型的な事例ではないかと考えている。

3. 研究とビジネスをつなぐ地域科学技術振興、そして母校への思いふたたび

その後、私は何度かの転職を経て、2011 年現在、科学技術振興機構（JST）サテライト高知の事務局長の職にある。高知に着任して丸 3 年を迎えた。これまで京大同窓会について意識をしたことはなかったが、2010 年の秋頃、京大関係者の講演会などが相次いで高知で行われ、不思議に思っていたら、京都大学地域講演会の持ち回りの年だったのである。また、このとき「京大土佐吉田会（高知県に籍をおく同窓生の会）」のことも初めて知った。このことを教えてくれたのは工学部出身の地元企業の社長さんであったが、すでにこれらの会は終わっていた。貴重な交流の機会を逸してしまったのは残念だが、高知に来て母校との接点を知ったことは、自分としても意外なほどに嬉しい思いであった。大学を卒業して 15 年を過ぎた今、母校への思いがあらためて湧き起こった次第である。

大学を卒業して民間企業に就職したことで、自分としては研究の道と決別したつもりだったが、振り返ってみると、就職後も研究機関や大学の人々と関わらなかった時期はなかった。それは、短い期間であれ京大地球物理学という研究の第一線に身を置いていたゆえんでもあろう。また、何らかの形で科学に関わりたいという思いを持ち続けていたことも一因かもしれない。

私はいま、「科学技術の成果を地域産業社会で活かす」言い換えれば「研究とビジネスをつなぐ」仕事をしている。それに加えて、百年誌を手にしたことをきっかけに、「母校や同窓会とも連携し、地域のお役に立つ」という意識を持つようにもなった。その一環、ということでもないが、今年 9 月には当方主催による研究成果報告会に尾池和夫先生をお迎えし、「未来に向けて ― 巨大地震に学ぶ」と題する特別講演をしていただいた。尾池先生には、この場を借りて御礼申し上げます。また、最後になりましたが、このような執筆の機会をいただいた、竹本先生はじめ関係の皆様には厚く御礼申し上げます。